Nagoya City University

名古屋市立大学　人文社会学部研究紀要　第19号　2005年７月

当為―実際反応間のずれが感情および偏見的反応に及ぼす影響[1]

Prejudice and negative self-affect induced by perceived discrepancies between 'should' and 'would' responses

久保田　健　市
Kenichi Kubota

Abstract

Participants(male undergraduates) were asked how a fictitious undergraduate would respond and how they should respond in several contact situations with a Black people. The salience levels of should-would discrepancies were manipurated on their responses. Participants were measured an affetive state at that point and then measured the cognitive and behavioral reactions toward Black people. Participants who were saliant in should-would discrepancies were more evoked negative self-affect(e.g. compunction) and unpleasant affect, and less pleasant affect. These results were consistent with the previous findings. However, results suggested that negative reactions toward Black people were mediated not to negative self-affect, but to unpreasant affect. Implications for prejudice reduction were discussed.

Key Words: prejudice, 'should' response, 'would' response, discrepancy, nagative self-affect

外集団に対する偏見（prejudice）は，社会心理学が古くから検討してきた主要な研究テーマの一つである．社会問題としての偏見は，人種的・民族的・宗教的対立の激しい国家・地域のみならず，ほとんどの社会で見られる．偏見のもととなる社会的カテゴリーも，性，人種・民族性，階級・社会階層に限らず，疾病・障害（ハンセン氏病，知的障害者など）や外見的特徴など，その範囲は広範に及ぶ．現代では，偏見の対象となる人々にあからさまな嫌悪を示したり，差別することは少なくなってきてはいるが，彼または彼女らと接触するのを回避するなどと，偏見の表明は潜在化する形で残っていると言われている（Dovidio & Gaertner, 1986）．

古典的には，社会心理学は外集団に対する否定的態度として偏見をとらえてきた．たとえば，Allport（1954）は次のように偏見を定義している．「ある集団に属しているからとか，それゆえにまた，その集団の持っている嫌な特質を持っていると思われるとかいう理由だけで，その人に対して向けられる嫌悪の態度，ないしは敵意ある態度である」．また，古典的には偏見は歪んだ心的構造の問題であるとして，偏見者に特有のパーソナリティ構造が主に検討されてきた

1　本研究の一部は，吉田富二雄先生（筑波大学心理学系）との共同で，日本グループ・ダイナミックス学会第48回大会（2000年）において発表されたものである．また，研究の実施には西田章吾氏（筑波大学人間学類卒業）の協力を得た．記して感謝の意を表する．

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

（Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson, & Sanford, 1950など）．しかし，社会心理学に認知的アプローチが導入されると，偏見は言わば感情的あるいは評価的な要素を含む集団成員に関する認知表象として，ステレオタイプ（stereotype）により類似した概念として扱われることが多くなってきた．さらに，偏見は特定の人々に固有の歪んだ態度ではなく，すべての個人に共通する認知的処理の仕組みや性質がかかわる現象であり，そこに介在する情報処理のプロセスやメカニズムを解明し，その全体像や機能を明らかにすることへ関心が向けられるようになった（Oakes, Haslam, & Turner, 1994）．

社会的認知の観点から偏見を分析する従来の研究は，カテゴリー化変容のアプローチと対人情報処理のアプローチの二つに大別される．カテゴリー化変容のアプローチは，社会的アイデンティティ理論（Tajfel, 1978, Tajfel & Turner, 1979, 1986）および自己カテゴリー化理論（Turner et al., 1987）に基づく．これらの理論では，偏見の生起において，集団成員性の観点から自己および他者を内集団と外集団にカテゴリー化する認知過程の役割を重視する．一方で，集団間接触（Allport, 1954）や上位目標の達成（Sherif, 1967）など，かねてより偏見の低減や集団間の調和に効果があるとされてきた方策が内―外集団間のカテゴリー化をどのように変容させるのか，どのようなカテゴリー化認知の変化が集団間関係の改善に役立つのかが検討されている（詳しくは，Dovidio, Gaertner, Esses, & Brewer, 2004；久保田，2004を参照のこと）．

しかし，カテゴリー化は人間の認知の基本的な原理であるがゆえに，一時的に内―外集団間のカテゴリー化を潜在化させることは可能でも，それを永続化させるのは困難である．対人情報処理の過程に関する研究は，カテゴリー化あるいはステレオタイプの活性化が知覚者の意図を必ずしも伴わずに引き起こされる自動的過程（automatic process）であることを示している．たとえば，Devine（1989）は閾下プライミングの手続きを用い，黒人に関連する刺激語を閾下呈示した後に，文章描写されたターゲット（人種は特定されていない）の印象評定を行わせた．すると，黒人に対する顕在的な偏見的態度のレベルにかかわらず，ターゲットに対して形成された印象は否定的なものとなった．

ターゲットの社会的カテゴリーに関する情報や特定のカテゴリー化を顕在化する社会文脈的要因が与えられると，自動的にステレオタイプ化の活性化あるいはカテゴリー化がなされるのであれば，偏見やステレオタイプの抑制のためには，ステレオタイプを後の社会的判断や意思決定において適応しないようにコントロールすることが重要となる．しかし，自動的過程を抑制するような意識的コントロールは必ずしも容易ではないことが知られている．たとえば，Mcrea, Bondenhausen, Milne, & Jetten（1994）は，ステレオタイプを考えないように求めたときに，かえって後の印象形成場面でステレオタイプに一致した他者印象が形成されてしまうことを明らかにし，これをリバウンド効果（rebound effect）と呼んでいる．単純な思考抑制によるコントロールでは，かえって逆接的な効果が生じる可能性があるのである．

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

Devine, Monteith, Zuwerink, & Elliot（1991）は，ステレオタイプ抑制の動機づけとして，良心の呵責（compunction）に代表されるような自己に対するネガティブな感情（以後，ネガティブ自己感情と表記する）の喚起を重視している．特定の社会集団の成員に対して偏見を示したりステレオタイプ的な反応をすることは，社会的に望ましくない行為として規範化されている．そして，個人の側から見れば，特に明示的な偏見的態度を持ち合わせていない個人は，偏見を否定する社会的規範を強く内面化していると考えられる．以上のような状況下で偏見的な反応を示してしまうことは，実際の反応が個人の内面的な規準から大きく逸脱していることを意味し，ネガティブな感情を引き起こす．特に，良心の呵責のような感情は自己焦点化を促し，「手がかり刺激—偏見的反応—罰（ネガティブ自己感情）」の連合が形成されると考えられる．このような学習の結果，後の機会では代替となる反応が探索され，実際の反応を行動規準に近づけていくことが期待される（Monteith, 1993）．

Devine et al.（1991）は黒人（実験１）と同性愛者（実験２）をターゲットにした実験から，非偏見的な行動規準からの逸脱と感情の関係を検討した．実験参加者はあらかじめターゲットに対する顕在的な偏見的態度を測定する質問紙への回答を求められた．そして，ターゲットとの接触状況を想定し，そのような場面でどう反応するべきか（実際反応，"would" response），また実際はどう反応してしまうか（当為反応，"should" response）を尋ねられた．その後，実験参加者は，当為反応と実際反応の回答上のずれ（discrepancy）を呈示され，そのときの感情状態を評定した．黒人をターゲットにした場合（実験１）には，偏見の程度にかかわらずずれの大きい人がずれの小さい人よりもネガティブ自己感情（罪悪感，自己批判自己への怒りなど），および不快感情（気がかりな，不安な，落ちつかないなど）を強く感じていた．同性愛者をターゲットにした実験２では偏見の程度が低く，ずれが大きかった人のみがネガティブ自己感情を感じたことが明らかになった．一方で偏見の程度が高い人は，他者に対するより強い怒りを示した．

さらに，Monteith（1993）は，同性愛男性の受験生の入学審査をする状況を想定し，実験参加者が性的な指向で不合格にした（すなわち偏見を示した）と報告することで，ずれを活性化させた（不活性条件では志願者は異性愛男性であった）．実験参加者は現在の感情状態を評定した後，同性愛者についてのエッセイを読み，生じた思考や感想を報告し，最後にエッセイ内容に関する再生課題を行った．その結果，Devine et al.（1991）と同様に，ずれを活性化させた条件の低偏見者のみが，ネガティブ自己感情を強く感じていた．そして，ずれを活性化させた低偏見者が，有意に長い時間をかけてエッセイを読み，自己に関する思考を多く報告し，エッセイの内容を正しく再生した．

当為—実際反応間のずれを意識することが，良心の呵責のようなネガティブ自己感情を喚起させるという結果は，本邦でも確かめられている．たとえば，潮村・伊藤（1994）は黒人と女性をターゲットに，また塚本（1998）は知的障害者をターゲットにし，Devine et al.（1991）と同様

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

の実験を行っている．それらの研究でも，（特に偏見の程度の低い人で）当為反応と実際反応のずれを大きく認知した人がネガティブ自己感情を強く感じていたという結果を報告している．

しかし，ネガティブ自己感情が偏見的反応やステレオタイプ適用を抑制する動因として機能するかどうかは，いまだ十分な検討がなされていない．すなわち，Devine et al.（1991），潮村・伊藤（1994），塚本（1998）では当為―実際反応間のずれの認知とネガティブ自己感情の関連性を明らかにはしているが，後の偏見的反応が抑制されるか否かという問題までは検討していない．また，Monteith（1993）は，当為―実際反応間のずれの活性化が自己に焦点化した認知過程を生じさせることを明らかにしたのであり，自己焦点化した認知（および，後の偏見的反応）がネガティブ自己感情によって媒介されるか否かという点については十分に検討されていないと思われる．以上より，偏見の意識的コントロールの過程に関して，ネガティブ自己感情が偏見の抑制に媒介的に機能するという予測が成り立つものの，先行研究では検討されないままであったと言える．そこで本研究では，当為―実際反応間のずれの顕在化がネガティブ自己感情および後の偏見的反応への影響を検討し，予測される感情の媒介的役割を明らかにすることを目的とする．

実験に先立ち，設定される仮説は次の２つである．

仮説１：当為反応と実際反応の間のずれを強く顕在化させた人は，特にマイノリティに対し顕在的な偏見的態度を持ち合わせていないとき，自己に対するネガティブな感情を強く感じるであろう．

仮説２：自己に対するネガティブな感情を強く感じた人は，後のマイノリティに対する反応を非偏見的なものにするだろう．

予備調査

目　的

本実験に先立ち，マイノリティとの接触場面における実際反応・当為反応・偏見的態度を測定する尺度，および，感情状態を測定する尺度の項目分析を行った．本研究では，日本人が外国人に対して抱くイメージを検討した我妻・米山（1967）および中村（1995）の結果などをふまえ，黒人をターゲットとして尺度の作成を行った．

方　法

被調査者　Ｔ大大学生91人（男子37名，女子54名）．

質問紙の構成

1．実際反応尺度・当為反応尺度 Devine（1989）および塚本（1998）などをもとに，黒人との直接的，間接的な接触場面を10個設定した．そしてそれらの場面において表出される嫌悪的感

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

情や回避・拒否的思考および行動が被調査者の個人的価値規準（～するべきだ）とどの程度適合するか回答した（当為反応尺度）．さらに同じ10個の接触場面における偏見的思考・感情・行動を実際にどの値度してしまうと思うかを回答させた（実際反応尺度）．どちらの尺度についても「全くそう思わない～強くそう思う」までの７件法で回答させた．各項目ごとに，実際反応尺度得点から当為反応尺度得点を減じた値をずれ得点として求めた．

2．感情測定尺度 Devine（1991）をもとに新たに項目を入れ替えて25個の感情語を選択した．そして個人的な価値基準に基づく反応と実際の反応のずれあるいは一貫性を意識した時に上記の感情をどの程度感じたかを７段階評定させた（「全くあてはまらない～よくあてはまる」）．

3．黒人に対する偏見的態度尺度：黒人に対する偏見を測定する尺度として開発されたAversive Racism Scale（Gaertner & Dovido, 1986）10項目，modern racism scale８項目とold-fashioned racism scale８項目（Mc Conahay, 1986）を参考にし，日本の状況に合うように表現を改めた18個の質問項目を作成した．被調査者は自らの考えやイメージを５段階で評定した（「まったくそう思わない～強くそう思う」）．

手続き　調査は，他民族に対する態度を測定する調査である旨を告げ，集合形式で行われた．調査実施にあたり，本研究が外国人に対する偏見・差別を解消する研究のためであり，被調査者の偏見を助長したり外国人の方の名誉を傷つける主旨のものではないということを口頭および文面で説明した．回答は当為反応尺度，実際反応尺度，感情評定尺度，黒人に対する偏見的態度尺度の順でなされた．注意事項として全ての質問において思ったことをありのまま答えることが強調された．質問紙は回答終了後，調査者が直接回収を行った．

結　果

当為反応・実際反応測定尺度　当為反応・実際反応・ずれ得点のそれぞれについて，各項目ごとに平均と標準偏差を求めた．そして，ずれ得点の高い４場面を12項目を選定した（Table 1）．

感情測定尺度　感情評定の構造を検討するため因子分析を行った．主因子法により初期解を求め，解釈が可能な３因子を抽出した後，Varimax回転を行った．各項目の因子負荷量をTable 2に示す．第１因子についてみると「悲しい」「がっかりした」「落胆した」「自己嫌悪」「罪悪感」などの項目で因子負荷量が高い．これらの項目はずれの意識化によって特に自己に向けられたネガティブな感情を表すと考えられる．よって第１因子を「ネガティブ自己感情」と命名した．次に第２因子を見ると「幸福な」「好感が持てる」「喜び」「退屈な」「楽しい」の５項目で因子負荷量が高い．すなわち，第２因子はより好ましい感情の因子負荷量が高く「快感情」の因子と命名した．第３因子は「緊張した」「興奮した」「嫉妬」「落ちつかない」「不安な」「怒り」の項目で因子負荷量が高い．これらの項目は強く不快な感情を表すものと考えられ，第３因子を「不快感

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

Table 1　黒人との接触場面における実際反応・当為反応の平均評定値

場面	反応	実際反応		当為反応		ずれ得点	
		M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
エレベーターに同乗							
	感情	3.57	1.82	2.41	1.36	1.16	1.63
	認知	3.08	1.83	2.22	1.35	0.88	1.66
	行動	1.64	1.26	1.38	0.82	0.26	1.09
夜道を一人で歩く							
	感情	4.61	1.76	3.71	1.69	0.90	1.52
	認知	3.73	1.95	2.93	1.68	0.83	1.73
	行動	2.76	1.82	2.21	1.38	0.57	1.53
隣の部屋の住人になる							
	感情	3.13	1.74	2.34	1.38	0.79	1.75
	認知	3.39	1.89	2.62	1.51	0.78	1.76
	行動	1.49	0.99	1.27	0.67	0.22	0.77
道で話しかけられる							
	感情	3.04	1.72	2.28	1.40	0.77	1.36
	認知	2.64	1.65	2.14	1.41	0.90	1.54
	行動	1.59	1.13	1.51	0.92	0.12	1.02

N=90

Table 2　感情評定尺度の平均評定値と因子負荷量

	M	*SD*	*F1*	*F2*	*F3*	h^2
第1因子：良心の呵責感情						
悲しい	3.85	1.71	.84	.09	.09	.72
がっかりした	3.65	1.79	.82	.10	.03	.68
落胆した	3.50	1.92	.80	.26	.18	.74
自己嫌悪	3.96	1.88	.73	.01	.40	.69
罪悪感	4.63	1.68	.69	−.21	.29	.60
憂鬱な	3.19	1.77	.66	.33	.36	.67
自己卑下	3.32	1.84	.66	.23	.34	.60
自己批判的な	3.56	1.84	.63	.38	.12	.56
むかつき	3.42	1.81	.63	.28	.50	.73
後悔した	3.36	1.93	.59	.29	.49	.68
さげすみ	3.02	1.79	.52	.33	.40	.54
恐ろしい	3.19	1.87	.51	.40	.36	.55
驚き	3.08	1.91	.50	.49	.23	.55
第2因子：快感情						
幸福な	2.58	1.87	.15	.85	.27	.82
好感が持てる	2.80	1.83	−.01	.80	.17	.67
よろこび	2.52	1.72	.18	.79	.20	.69
楽しい	2.58	1.92	.09	.62	.52	.67
第3因子：不快感情						
緊張した	2.93	1.87	.27	.40	.69	.71
興奮した	2.58	1.88	.23	.46	.67	.71
嫉妬	2.64	1.76	.26	.53	.59	.70
落ちつかない	3.15	1.91	.32	.50	.57	.67
不安な	3.28	1.76	.29	.33	.52	.46
怒り	3.15	1.69	.48	.11	.49	.49
除外された項目						
沈んだ	3.67	4.56	.31	.21	.16	.17
退屈した*	2.51	1.67	.28	.64	.36	.62
因子寄与			6.68	4.95	4.06	
因子寄与率(%)			26.71	19.80	16.22	

N=88

＊下位尺度におけるＩＴ相関の低さから，尺度項目としては用いられなかった

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

情」の因子と命名した．因子負荷量の高くない「沈んだ」と，下位尺度ごとのＩＴ相関において低い値を示した「退屈した」を尺度から削除し，最終的に23項目を選択した．

黒人に対する偏見的態度尺度　主因子法による因子分析を行ったところ，解釈可能な１因子が得られた．因子負荷量が.40以上の10項目を尺度項目に採用した（Table 3）．本実験では，尺度項目は５項目ずつ折半してpre-test（項目１，３，６，８，10）とpost-test（項目２，４，５，７，９）に用いた．

Table 3　黒人に対する偏見的態度尺度の平均値と主成分負荷量

尺度項目	*M*	*SD*	*F1*	h^2
家主が望まないのであれば黒人に部屋を貸す必要はない	2.11	1.04	.62	.33
一般的に日本人は黒人よりも頭がいいと思う	2.43	0.96	.61	.38
黒人の生活水準がなかなか向上しないのは彼らが怠けているからである	1.74	0.83	.59	.35
黒人と日本人が結婚することはあまり好ましくないと思う	1.71	0.89	.57	.32
黒人の人口が日本で増えればそれにともなって犯罪率も増加するだろう	2.88	1.00	.56	.31
肉体労働や単調な仕事は，黒人の性格と能力に合っていると思う	2.02	0.83	.54	.29
日本国内でこれ以上，黒人単純労働者が増えることは望ましくない	2.66	1.02	.53	.28
黒人は日本の文化をあまり理解していない	2.83	0.99	.47	.22
公衆の面前で黒人に呼び止められたら，おそらく人目が気になるだろう	2.12	1.05	.44	.19
黒人が日本人について批判的な意見を言っているのを聞くと腹立たしく思う	2.87	1.21	.40	.16
黒人がそばに来ると怖いと感じる	2.99	1.02	.34	.12
日本への帰化を希望する黒人はどんどん帰化させてもよい	2.18	1.02	−.32	.10
黒人の文化や価値観についてもっと知りたい	2.96	0.93	−.31	.17
元来，黒人と日本人は同程度の知性を有している	3.43	1.02	−.31	.09
黒人に対する偏見・差別は日本においては問題ではない	3.66	0.88	.25	.06
自分の家族の誰かが黒人と親しくするのはいいことだ	3.60	1.03	−.20	.04
日本にいる黒人の差別・偏見に対する怒りは理解することができる	3.11	1.05	.00	.05
一般的に高い地位にある黒人は，権力をひけらかしたりしない	3.79	0.95	.00	.00
因子寄与			3.49	
因子寄与率(%)			19.38	

N=90

本実験

方　法

実験参加者　Ｔ大大学生男子51人

実験計画　偏見レベル（高／低）×ずれ顕在化（高／低）の２要因実験参加者間計画．

手続き　１回の実験につき１人の実験参加者が参加した．実験参加者は実験室に入室した後，実験者自身の研究である「社会的態度に関する実験」と他の大学院生に依頼された「記憶の実

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

験」という全く別の２つの実験を行うと教示された．

1．実際―当為反応間のずれの顕在化と感情測定：「社会的態度に関する実験」の最初の課題として，実験参加者は黒人との４つの接触場面で，架空の大学生（感情・思考・行動）が偏見的反応をどの程度するか（実際反応），および，実験参加者自身の価値基準からどの程度そうするべきであるか（当為反応）に回答するよう求められた．回答に先立ち，場面をイメージさせ内容を口述で報告させる練習試行を行った．また，実際反応の測定において，場面描写と評定項目は口頭で教示された．さらに，黒人に対する偏見的態度を測定する５項目の尺度（pre-test）にも回答するよう求められた．

その後，実験者は実験参加者に次のように告げた．「先程の質問では架空の人物Ａさんの気持ちになって答えてもらいましたが，そこにはあなたの感情や考えといったものが少なからず反映されていると思います．そこでＡくんに投影されたあなた自身の感情や考えが個人的な価値観とどの程度ずれているのかを測って見ようと思います」実験者は，実験参加者の実際反応と当為反応の差を得点化し（ずれ得点），９点以上の実験参加者に対して次のようなフィードバックを与えた（高顕在化条件）．

「これを見ますとあなたのずれ得点は比較的高いもので，あなたは意識してないかもしれませんが，普段の生活の中で偏見や予断に基づいた行動はいけないと考えていながらも，ついついそうした偏見的に振る舞っていることが見られるのではないかと判断されます．あなたは気がついていないかもしれませんが，知らず知らずのうちに相手を傷つける言動をしている場合もあると思われます．何か思い当たる節がありますか？十分注意しましょう．」

一方，８点以下の実験参加者については，「これを見ますとあなたのずれ得点は比較的低いもので，自分なりの価値基準にしたがって日ごろ他者と接しているのではないかと診断されます．もちろんあなたの実生活においてはあなたの個人的価値観と実際の行動には多少のずれが生じている可能性がありますが，全く問題のない範囲だと思われます．これからも自分の行動を律するということを大切にして下さい．」と告げた（低顕在化条件）．そして，実験参加者は現在の気分を感情測定尺度で評定した

2．黒人に対する偏見的反応の測定：実験者は，続けて記憶に関するまったく別の実験を実施すると教示した．実験参加者は，黒人を含むマイノリティが不利な扱いを受けた出来事が描写された短い文章を提示され，１分間で内容を記憶するよう言われた．干渉課題として１分間のアナグラム課題を行った後，実験参加者は出来事の再生と理解を尋ねる質問に回答した．以上の課題は，同様の順序で４試行行われた．最後に，実験参加者は黒人との接触場面における実際反応と偏見的態度に関する尺度に再び回答し（post-test），実験の目的や教示について十分なディブリーフィングを受けた．

実験で用いた尺度　実験で用いられた尺度のうち，実際反応尺度・当為反応尺度・黒人に対す

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

る偏見的態度尺度（pre, postの順でα＝.93,.91）・感情測定尺度（ネガティブ自己感情，不快感情，快感情の順で，α＝.88,.69,.90）については，予備調査にて作成した項目を用いた．

偏見的反応の測定のために，実験参加者は，「マイノリティが不当に偏見・差別を受けている」，また逆に「マイノリティの側に不当な扱いの原因がある」のどちらにも考えることができる出来事が描写された文章を読んだ．そして，出来事の責任がマイノリティにあるのか，それとも他の登場人物にあるのか，差別を受けたというマイノリティの主張は正当かなどを８項目で評定した（「全くそう思わない～強くそう思う」の７段階評定）．４つの出来事のうち黒人に関するものが２個で，残りは他のマイノリティ（女性，身障者）に関するものであった．各文章間の分量（約150字）や難易度は等しくなるよう配慮された．結果の分析では，黒人にかかわる２場面の評定値のみを用いた．

結　果

実験参加者の分布　偏見レベルの要因については，黒人に対する偏見的態度を測定する尺度項目の中央値を基準に実験参加者全体を２群に分割した．また，ずれ顕在化の要因については，ずれ得点に関する予備調査の結果をもとに９点を基準として２群に分けた．その結果，各条件における実験参加者の分布は［高偏見・高顕在化］条件12人，［高偏見・低顕在化］条件12人，［低偏見・高顕在化］条件12人，［低偏見・低顕在化］条件は15人であった．各条件ごとに喚起された感情および偏見的反応に関する指標の平均・標準偏差をTable ４に示す．

Table ４　ずれの顕在化と偏見レベルによる感情および偏見的反応の平均および標準偏差

	高顕在化				低顕在化			
	高偏見者[a]		低偏見者[a]		高偏見者[a]		低偏見者[b]	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
喚起された感情								
ネガティブ自己感情	1.94	0.13	2.23	0.41	1.21	0.24	1.45	0.51
不快感情	1.75	0.17	1.72	0.37	1.06	0.28	1.15	0.30
快感情	1.42	0.45	1.63	0.65	2.04	0.75	2.15	0.53
偏見的反応								
出来事認知	3.41	0.46	2.13	0.42	3.51	0.46	2.43	0.63
偏見的態度（post）	3.17	0.57	1.70	0.26	3.17	0.41	1.59	0.27
実際反応（post）	2.56	0.24	1.65	0.22	2.79	0.36	1.75	0.21
実際反応変容度	0.46	0.26	1.14	0.25	0.04	0.44	0.54	0.40

[a] N=12,　[b] N=15

喚起された感情　ネガティブ自己感情・不快感情・快感情の平均評定値を従属変数とし，偏見レベルおよびずれ顕在化の程度を独立変数とした２要因分散分析を行った．その結果，ネガティブ自己感情についてはずれの顕在化（F（1,51）＝54.09，p＜.01）および偏見レベル（F（1,51）＝6.76，p＜.05）の主効果が有意であった．不快感情（F（1,51）=61.74，p＜.01）および快感情（F（1,51）＝24.40，p＜.01）については．ずれ顕在化の主効果のみが見られた．

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

すなわち，実際反応と当為反応のずれを強く意識していた実験参加者は，そうでない参加者に比べ，ネガティブ自己感情と不快感情を強く感じ，快感情をあまり感じていなかった．また，非偏見的な実験参加者は偏見レベルの高い参加者に比べ，ネガティブ自己感情を強く感じていた．以上の結果は，仮説１と一致するものであり，潮村・伊藤（1994）や塚本（1998）の結果を繰り返し確かめたものであると言える．

ずれ顕在化・感情喚起・偏見的反応の関連性　ずれ顕在化・感情喚起・偏見的反応間の関連性を検討するために，パス解析を行った．パス解析の結果をFigure　1に示す（５％水準で有意であったパスのみを示す）．

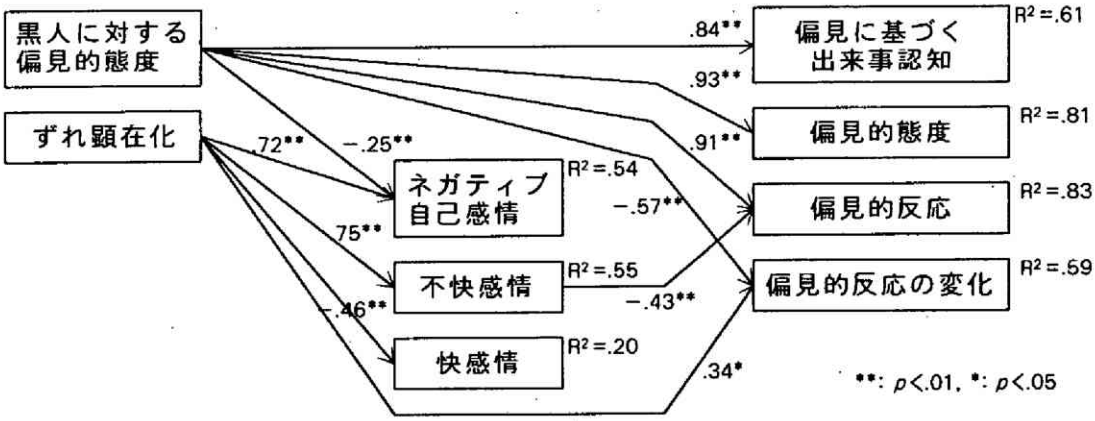

Figure　1　ずれ顕在化・偏見レベル・感情・偏見的反応間の関連

第１に，「ずれ顕在化の高低」は「ネガティブ自己感情」（$\beta=.72$，$p<.01$）および「不快感情」（$\beta=.75$，$p<.01$）との間で有意な正の関連が認められた．加えて，「快感情」に対しては有意な負の効果が見られた（$\beta=-.46$，$p<.01$）．また，「偏見レベルの高低」は「ネガティブ自己感情」と負の関連性を示した（$\beta=-.25$，$p<.01$）．

第２に，喚起された感情と後の偏見的反応の関連性について，仮説とは異なり「ネガティブ自己感情」は後の偏見的反応とまったく関係が見られなかった．代わって，「不快感情」が「実際反応」と有意な正の関連性を示した（$\beta=-.43$，$p<.01$）．すなわち，当為反応と実際反応の間のずれの大きさを強く意識した参加者は，不快感情の喚起を媒介として，改めて測定された黒人との接触場面における実際反応を非偏見的なものへと改善する傾向が見られた．このほか，「ずれ顕在化」はより直接的に「実際反応のpre-post変化」との有意な正の関連を示した（$\beta=.34$，$p<.05$）．また，「偏見的態度のレベル」も，感情を媒介せずに「実際反応」「偏見的態度」「出来事認知」に正の効果を及ぼしており，逆に「実際反応の変化量」（pre-post評定値間の差異）に対しては負の効果が認められた．

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

全体的考察

本研究は，マイノリティとの接触場面において「こうするべきである」という反応（当為反応）と「実際そうしてしまうだろう」と推測される反応（実際反応）とのずれの顕在化と，それに伴う感情的反応および偏見的な評価・態度の関連を検討した．当初設定された仮説のうち，仮説1は支持された．すなわち，当為—実際反応間のずれを強く意識することは良心の呵責などを含むネガティブな自己感情を，そして不快感情を強く喚起させた．また，ずれを強く意識した実験参加者は，快感情をあまり感じなかった．以上のようなずれの顕在化に関する主効果が見られたという結果は，先行研究の知見と一致するものと言える（Devine et al., 1991; Monteith, 1993；潮村・伊藤，1994；塚本，1998）．いくつかの先行研究で見られた偏見的態度のレベルとずれの顕在化の交互作用は，本研究では見られなかった．これは，実験参加者となった日本人大学生がターゲットである黒人に対し強い偏見を表明するわけではなく，全体的に示される偏見的態度のレベルがずっと低かったためと考えられる．いずれにせよ，当為—実際反応間のずれの認知や活性化がネガティブな自己感情を引き起こすことは本研究でも繰り返し確かめられた．

その一方で，後の偏見的反応の抑制におけるネガティブな自己感情の媒介的機能に関し設定された仮説2は支持されなかった．パス解析の結果，ネガティブ自己感情の強さと後の偏見的反応を測定した複数の指標との間に有意な関連性はまったく見られなかった．すなわち，ずれの認知によって喚起されたネガティブ自己感情が後の偏見的反応の抑制を動機づけることを示す証拠は得られなかった．偏見的反応を抑制するという証拠が見られたのはむしろ不快感情であり，不快感情を強く喚起された実験参加者が，操作後に測定された実際反応を非偏見的なものに改めたという傾向が見られた．加えて，ずれの意識が感情を媒介せず実際反応の変化量と直接的な関係が認められた．

以上の結果は，今回の実験参加者が黒人への偏見の抑制に関しどちらかと言えば他律的なプロセスに従っていたと考えられる．その理由としては，第１にずれの顕在化が直接偏見的反応の表明の抑制と正の関連性を示した．このことは，実験参加者の立場から見れば，こうするべきと自分で設定している規準と実際の反応の間に隔たりがあると実験者から言われ，特に感情的な葛藤を引き起こすことなく，そうした他者からの指摘に従い行動を改めた，ととらえることができる．特に感情的な葛藤を引き起こさなかったのは，実験参加者と黒人の間の集団間関係が強い集団間葛藤を含むような劣悪なものでなかったことも関係していると思われる．第２に，ずれの認知と偏見的反応の抑制を媒介したのは不快感情であった．実験者から思いがけずに当為反応と実際反応間の食い違いを指摘されたとき，実験参加者としてはむしろそれを不当な指摘であると認知した可能性が考えられる．それゆえに，実験者による不当な評価への反応として，怒りなどの強い不快感情を示し，それが後の偏見的反応の抑制を動機づけるよう機能したと考えることができる．

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

一方，Devine et al.（1991）やMonteith（1993）が主張するような，ネガティブ自己感情を軸とした偏見抑制のモデルは，自律的なプロセスであると言える．偏見に基づいた反応を示してしまったことに対し自責の念を感じることで，その感情状態から回避するために，実際反応を非偏見的なものとなるよう統制しようという動機づけを強める．それが，実際反応と（当為反応が依拠する）個人の行動規準をより低い偏見レベルへの押し下げていくことが想定されているからである．本研究の結果は，少なくとも現状の日本社会では，自律的な偏見低減のプロセスは成立しにくいことを示しているのかもしれない．アメリカ合衆国や他のヨーロッパ諸国などと比較して，現在の日本社会は全体的に見て集団間の葛藤が顕在化されていない状況が比較的長期間継続されている．もちろん，よりミクロな社会レベルでは，日系ブラジル人をはじめ外国人の労働者とその家族が大量に流入し，彼らとの葛藤が大きな社会問題化している地域も少なくない（愛知県豊田市や静岡県浜松市など）．しかし，そのようなミクロな社会レベルでの集団間葛藤が問題意識として国民全体に共有されているとは言い難い．また，マイノリティに偏見的態度を示すことによって被る不利益（社会的な信用を失う，など）も明確に意識されにくく，個人の行動を強く規定する規準として機能することができない可能性も考えられる．

他律的なプロセスが機能することで，一定の効果が得られるかもしれないが，他律的なプロセスに頼ることは負の側面も伴うだろう．学習の文脈で古くから指摘されてきたことであるが，罰や報酬による外発的な動機づけの手続きを過剰に採用すると，非偏見的な行動規準が内面化されず，非偏見的な行動が特定の場面（監督者が監視しているなど）でしか表明されなくなるおそれがある．必ずしも意に沿わない行為をすることによって生じる認知的不協和（cognitive dissosnance）を罰や報酬と行為の連合を強化することによって低減するからである（Festinger & Carlsmith, 1959）．したがって，どのようにしたら自律的なプロセスが機能するようになるのかを考慮に入れ，さらに実験の手続きを詳細に検討して，研究を積み重ねていく必要があるだろう．たとえば，近年ではＩＡＴ（inplicit assosiation test, Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）や自動的評価課題（automatic evaluation task, Fazio Jackson, Dunton, & Williams, 1995）など個人が統制困難な潜在的態度を測定する手法がいくつか考案されている．それらの潜在的な測度と顕在的な測度を用いて両者のずれを意識化させたり，潜在的なテストの結果を予測させ，その予測に応じた偽のフィードバックを与えるなどの手法を用いることができるだろう．そのほか，偏見の表明と関連があるとして近年さかんに検討されている社会的優越志向（久保田，2003；Pratto, 1999; PrattoSidanius, Stallworth, & Bertram, 1994）のような個人差変数を導入したり，黒人以外のマイノリティをターゲット集団にした実験を展開することも当然必要であると考えられる．

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

参考文献

Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. (1950) *The authoritarian personality*. New York: Harper.
（アドルノ，T．W．（著）田中義久・矢沢修次郎・小林修一（訳）（1980）権威主義的パーソナリティ 現代社会学体系　12　青木書店）

Allport, G. W. (1954) *The nature of prejudice*. Cambridge, Mass: Addison-Wesley.
（オールポート，G．W．（著）原谷達夫・野村　昭（訳）（1968）偏見の心理　培風館）

Devine, P. G. (1989) Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality & Social Psychology*, **56**, 5-18.

Devine, P. G., Monteith, M. J., Zuwerink, J. R., & Elliot, A. J. (1991) Prejudice with and without compunction. *Journal of Personality & Social Psychology*, **60**, 817-830.

Dovidio, J. F., & Gaertner, S. L. (1986) Aversive form of racism. In J. F. Dovidio & S. L. Gaertner (Eds.) *Prejudice, Discrimination, and Racism*, New York: Academic Press. Pp. 61-89.

Dovidio, J. F., Gaertner, S. L., Esses, V. M. & Brewer, M. B. (2004) Social Conflict, harmony, and integration. In T. Millon, M. J. Lerner, & I. Weiner (Eds.) *Handbook of psychology*. vol. 5. *Personality and social psychology*. New York: Wiley. Pp. 485-506.

Fazio, R. H. (1995) Attitudes as object-evaluation assosiations: Determinants, consequences, and correlates of attitude accessibility. In R. E. Petty & J. A. Krosnick (Eds.) *Attitude strength: Antecedents and consequences*. Mahwah, NJ; Eribaum. Pp. 247-282.

Festinger, L. & Carlsmith, J. M. (1959) Cognitive consequences of forced compliance. *Journal of Abnomal & Social Psychology*, **58**, 203-210.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998)　Mesuring individual differences in implicit cognition: The implicit assosiation test. *Journal of Personality & Social Psychology*, **74**, 1464-1480.

久保田健市（2003）大学生の社会的公正に関する志向性と社会的・政治的態度　人間研究（武蔵野女子大学人間関係学部紀要），**8**，１－29.

久保田健市（2004）ステレオタイプと集団認知　大島　尚・北村英哉（編）認知の社会心理学　６章　北樹出版　87－107.

McConahay, J. B. (1986)　Modern racism, ambivalence, and the modern racism scale. In J. F. Dovidio & S. L Gaertner (Eds.) *Prejudice, Discrimination, and Racism*, New York: Academic Press. Pp. 91-125.

Mcrea, C. N., Bondenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994) Out of mind but back in sight; Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality & Social Psychology*, **67**, 808-817.

Monteith, M. J. (1993) Self-regulation of prejudiced responses: Implications for progress in prejucie-reduction efforts. *Journal of Personality & Social Psychology*, **65**, 469-485.

中村　真（1995）大学生の外国イメージに関する研究ー好きな外国人と嫌いな外国人のイメージ比較ー　東京都立大学心理学研究　**5**，33－38.

Oakes, P. J., Haslam, S. A., & Turner, J. C. (1994) *Stereotyping and social reality*. Oxford: Blackwell.

Pratto, F. (1999) The puzzle of continuing group inequality: Piecing together psychological, social, and cultural forces in social dominance theory. In Zanna(Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, **31**, 191-263.

Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Bertram, F. M. 1994. Social dominance orientation: A personality variable predicting social and political attitudes. *Journal of Personality & Social Psychology*, **67**, 741-763.

Sherif, M. (1967) *Group conflict and co-operation: Their social psychology*. London: Routledge & Kegan Paul.

潮村公弘・伊藤麻希子（1994）感情から捉えた偏見・ステレオタイプの認知構造ーステレオタイプ化類型ご

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

との測定ー　日本社会心理学会第35回大会発表論文集　238-239.

Tajfel, H. (1978) *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. London: Academic Press.

Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979) An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.) *The Social psychology of intergroup relations*. Monterey, Ca: Brooks/Cole. Pp. 33-47.

Tajfel, H., & Turner, J. C. (1986) The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W. G. Austin (Eds.) *Psychology of intergroup relations*. 2nd.ed. Chicago: Nelson-Hall. Pp. 7-24.

塚本恵信（1998）知的障害者への偏見に関するセルフ・ディスクレパンシーの効果　日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集　212－213.

Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherell, M. S. (1987) *Rediscovering the social groups: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell.

（ターナー，J．C．・ホッグ，M．A．・オークス，P．J．・ライチャー，S．D．・ウェザラス，M．S．（著）蘭　千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美（訳）（1995）社会集団の再発見ー自己カテゴリー化理論　誠信書房）

我妻　洋・米山俊直（1967）偏見の構造ー日本人の人種観ー　日本放送出版協会

NII-Electronic Library Service